



県民の森 植物紹介③③

－アカマツ（マツ科）－



マツは季節が変わっても常に緑色であることから、古来より縁起が良い木とされ、お正月の飾りとしても使われてきました。日本のマツは、アカマツとクロマツが代表格ですが、アカマツは樹皮が赤褐色で、クロマツは灰黒色です。アカマツは針葉が細くて柔らかいことからメマツ（雌松）と呼ばれ、内陸部に生育しています。クロマツはやや太くてかたいことからオマツ（雄松）と呼ばれ、特に潮風に強いことから海岸林として広く自生、植栽されています。

アカマツの花は初夏、枝の先に円柱形の花が咲きます。頂部に雌花、下部に雄花がついて花粉がいっぱい詰まっています。花粉は風に乗って運ばれて、秋に実が出来ます。これが松ぼっくりです。アカマツの松ぼっくりは熟すまでに2年かかります。そして晴れた日に松かさが開いて種を飛ばします。

建物の柱や家具として利用されており、なかでも岩手県産の材はたいへん質が良いため、江戸時代、特に「南部赤松」（南部地方のアカマツの意味）と呼ばれるようになりました。ナンブアカマツは県民の森の森林ふれあい学習館の床材や多目的ホールの椅子などにも使用されており、岩手県の木として親しまれています。

また、県民の森では、昭和49年に開催された第25回全国植樹祭で昭和天皇・皇后両陛下がお手植えになられたアカマツや、園内に多数植樹されているアカマツ林のなかを散策することができます。

